

新しい時代に即応した農協組織のあり方

—画期的な情報収集・提案機能の強化—

研究所長 七戸長生

今年、JA全国大会が開かれる年であるためか、農協組織のあり方をめぐる議論が盛んに行われている。それは同時に、わが国の農業がWTO体制下の厳しい社会・経済的な環境への対応を余儀なくされていることも密接に関連していると思われる。今後は、どういう方向で、どういう活動を進めて行けば良いのか見当がつかない人々、どうやって活路を拓いたらよいか全く出口が見付からない心境の人々が多いだけに、頼みの綱の農協に何とか頑張つて欲しいという願望が、この問題に関心を集中させていると思われる。

だが、逆説的に言えば、そのように明るい展望をつかみかねて、打開の途を求めて苦慮している多くの人々の結集する組織が、他ならぬ現実の農協である。したがって、かつての行政補助的な団体組織への、安易な期待や依存を引きずって、系統組織を頼みの綱にすることは、無い物ねだりの悪循環にはまってしまうに違いない。この意味で、組織的な手順を踏んで真剣な討議が進められることを大いに期待するものである。

ところで、こういった討議を深めていく際の手順として、協同組合としてのあるべき姿が、第一の焦点として据えられることが多い。このこと自体には異論はないが、そこに結集するのはどういう人達か、それはどこに住む人達なのか、といった点までも具体的に踏み込んで議論していかないと、抽象化された「あるべき姿」が宙をさまづつことになりかねない。つまり、いつ、どこで、誰が、何を、という一連の関連性のある課題の中から、場面（いつ、どこで）と主体（誰が）が二の次にされて、もっぱら何を（目的意識と行動原理）という戦略のポイントばかりが論議されるとしたら、今まさに二十一世紀に突入しようとしている時代状況への配慮に、重大な欠陥があると言わざるを得ないのである。

改めて指摘するまでもないが、わが国の社会・経済は高度経済成長期を経過して著しい変貌を遂げた。「貧しさからの解放」という農村の痛切な合い言葉は、今日ではもはや完全に消え失せたように感じられる。過酷な重労働が農民の肉体を惨めに変形させるほどの遅れた農作業の記憶も、機械化や省

力化の技術の普及の中で、ほとんど忘れ去られようとしている。その反面で、いわゆる近代化の掛け声にせき立てられて、農業の生産や流通の仕組みは、規格化や効率化を基本とする工業化の流れの中に組み込まれ、季節性や地域性を強く持った農産物に対する需要においても、大量生産・大量消費のパターンに照応したニーズに、圧倒的に左右される段階に移行している。要するに、工業化と都市化の論理が農業を支配するに至っているのである。

そればかりではない、人々の行動原理も都市化の波に流されている。地震、雷、火事、オヤジ、と呼ばれるほどに権威のあつた家長制も姿を消し、核家族化どころか、個人の自立・イエの解体が急速に進んでいる。かつては地縁と血縁で強固な閉鎖性を示していた農村集落のかなりの部分が「混住社会」へと変質し、個々の生活面でも、近所付き合いの面でも都市化の傾向が強まってきた。

これだけ激しく世の中が変化しているとしたら、もちろん好ましくない変化は早急に是正しなければならないが、協同組合としてのJAは、これに即応してどのように変わっていくかなければならないか。これが「あるべき姿」論の核心にあたるが、私としては次の三点を提起したい。まず第一にイエを単位とするあり方から脱却して、ヒトを単位として考える組織、それも地域の人々を、性別、年齢を問わずに平等に包括し得る組織へと転換していくことが必要である。女性も、若者も、老人も、こぞつて結集する組織でなければ新しい時

代に適合していけないし、元気も出てこない。そして、このような多彩な人々の組織であるとしたら、どういう目的意識や行動原理が最大公約数となり、楽しさと活力をもたらず組織となりうるかが主題となろう。

また従来のような農業を営むイエの組織（ということは職能組合的な路線）から脱却して、上述のようなヒトの組織へと展開していくと、必然的に、その地域に根ざして多様な社会活動をやっているヒトを包括した組織へと進んでいく。わが家のムスメが加入すると共に、その友達の非農家のムスメもが加入することになって、地域協同組合への発展路線が描かれることになる。

そして、このような新しい方向に踏み出した時に最も強く求められる機能は、上述のような社会経済変動に伴う、人々の行動原理の変化を「情報」としてキャッチし、それを構成員にいち早く伝達することである。それは、消費者の農産物に対するニーズの面の情報にとどまるものではなくて、市場開拓や販売宣伝の戦略にとつて決め手となる情報や、どのような加工・流通のチャンネルを選択すべきかといった高度の専門的な情報も含まれる。実は、こういった情報の収集・提供という重要な仕事をなおざりにしてきたところに、今日の農協運動の危機的状況の根元があるといつてもよからう。いわゆる大型合併の眼目もこの点に置かれるべきではないか。そのための人材の育成・蓄積こそ急務である。